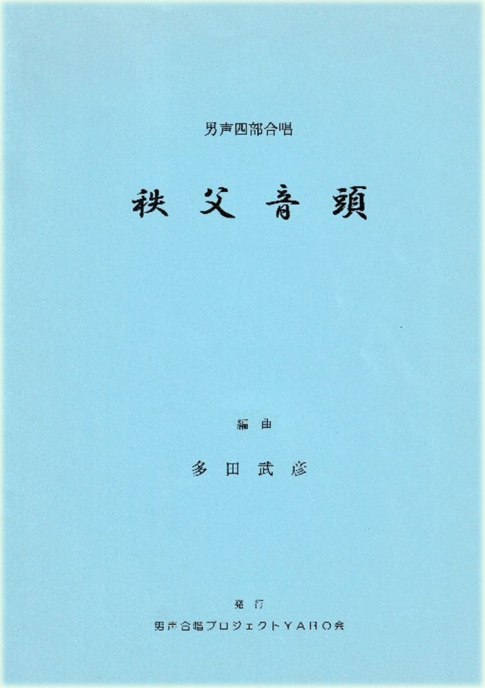
タダタケさんからの贈り物

多田武彦編曲「秩父音頭」

加藤良一　令和4年(2022)10月31日

平成17年(2005)、埼玉県を代表する民謡として親しまれている「秩父音頭」を作曲家・多田武彦さんが編曲し、男声合唱プロジェクトYARO会にプレゼントして下さいました。多田武彦さんは、男声合唱界ではタダタケさんと親しみを込めて呼ばれていました。



「秩父音頭」は、古くから庶民の間で歌われてきた盆踊り唄、昭和初期には「秩父豊年踊り」と呼ばれていました。群馬県「八木節」、栃木県「日光和楽踊り」と合せて「関東三大民謡」ともいうようです。埼玉県の小中学校では体育教材として採り入れられることがあり、体育の授業で踊ったり、運動会や体育祭などで披露したりします。

「秩父音頭」のルーツは新潟県の『越後甚句』とされ、三国峠を越えて秩父に伝わったといわれています。発祥の地皆野町は、埼玉県の西北、秩父郡の東北に位置し、東は東秩父村、北は長瀞町と本庄市、南と西は秩父市に接しています。奥秩父に源を発する荒川に赤平川、日野沢川、三沢川が注ぎ、右岸側には開けた河岸段丘が形成されて町の中心部を形成しています。

金子伊昔紅が今の形の「秩父音頭」に改良

「秩父音頭」は古来から伝わる盆踊り唄でしたが、町内の医師であり俳人であった金子伊昔紅さんが昭和初期に見た盆踊りは公の場で踊って見せることができるものではなかったといいます。それほど猥雑で卑猥な言葉が使われていたようです。そこで、伊昔紅さんは、下記のような歌詞を自作するとともに、公募を行いました。伊昔紅は俳号で、本名は元春。

～ 鳥も渡るかあの山越えて　雲のさわ立つ奥秩父 ～

～ 花の長瀞あの岩畳　誰を待つやらおぼろ月 ～

～ 秋蚕しもうて麦まき終えて　秩父夜祭待つばかり ～

こうして生まれ変わった「秩父音頭」は、昭和5年(1930)には「秩父豊年踊り」として明治神宮遷座十周年記念祭に奉納され、広く知られるようになりました。昭和8年(1933)、帯広市で開催された全国レクリエーション大会に出場、優勝するとともにレコード吹き込みも行われ、全国に紹介されました。

昭和25年(1950)には埼玉県下の小中学校の体育教材に採用、正式に「秩父音頭」という名称が採用され、現在の踊りの形がつくられたのもこの時期です。手振り身振りには秩父の生業である養蚕や農耕の仕草を、また屈伸を伴う動作には峠を生業の場として生きた人々の足腰の強さを表わしているといわれます。伊昔紅さんが始めた歌詞の公募はその後も続き、古来より培われてきた秩父の風土と、今を生きる人々の想いを反映し、無数の歌詞があると言います。

伊紅昔の長男である俳人金子兜太さんは「秩父音頭」に寄せて、「民謡とは正統維持とともに、その時代に適した修正をすることにより末永く歌い継がれていくものだと思う。ともかく、秩父音頭は町の努力をはじめ、人に恵まれて花開いた。」と述べています。また、前述の、明治神宮遷座十周年記念祭にあたっては、各県知事宛てに代表的な民謡を出してほしい旨の依頼があり、その時の埼玉県知事と伊昔紅さんが埼玉学生誘掖会※という、学生に奨学金を支給する団体を通じた知り合いだったことから、相談を受け発奮したと、息子の兜太さんは新聞のインタビューに答えている。

秩父・長瀞渓谷と屋形船

※**埼玉学生誘掖会**：明治35年(1902)、東京で勉学に励む埼玉県出身学生のための寄宿舎を設置するなど、学生支援を目的に創設された団体。渋沢栄一、本多静六等が中心となって、当時の東京市牛込区(現在の新宿区)に設立された。初代会頭には渋沢栄一が就任。「誘掖」は「導いて助けること」下記参照
http://rkato.sakura.ne.jp/essay/e129_musashibusi.pdf

多田武彦編曲「秩父音頭」

平成17年(2005) 5月、タダタケさんからコンサートのアンコールにでも歌ってくれと編曲して頂いた「秩父音頭」は、直筆の楽譜をそのまま印刷製本しました。楽譜の最後に、編曲譜のプレゼントに至った経緯などを挨拶文として掲載しました。↓

多田武彦先生と男声合唱プロジェクトＹＡＲＯ会とのつながりは、2003 年 11 月に開催した第１回ＹＡＲＯ会ジョイントコンサートの合同演奏曲として『富士山』を歌ったのがきっかけで始まりました。

ＹＡＲＯ会の演奏を聴かれた多田先生は、その年全国でたくさん演奏された『富士山』の中でも確実に三本指に入ると評価してくださいました。表現力や声の良さに感心されながらも、さらに磨けばもっと良くなるとの思いを強くお持ちになられ、ＹＡＲＯ会に対していろいろなアドヴァイスをしていただきました。

そのような中から、「多田武彦合唱講習会」の企画が持ち上がりました。願ってもないことです。しかし、諸事情から企画はなかなか具体化せず、当初の予定よりだいぶ遅れてしまいましたが、紆余曲折を経てようやく 2005 年２月５日開催に漕ぎつけました。

講習会には、北は北海道から南は九州まで、全国から熱心な男声合唱ファンが集まり、多田先生の薫陶をじかに受けるという素晴らしいひとときが実現しました。多田先生は、受講生の熱心さ、レベルの高さ、そして運営面など多くの点に感銘を受けられ、我われスタッフに対しても過分なお褒めの言葉をいただきました。

その後、多田先生より夢のようなお話があり、埼玉県に因んだ男声合唱曲をＹＡＲＯ会にプレゼントしていただけるとのことでした。そして届いた楽譜がこの『秩父音頭』です。

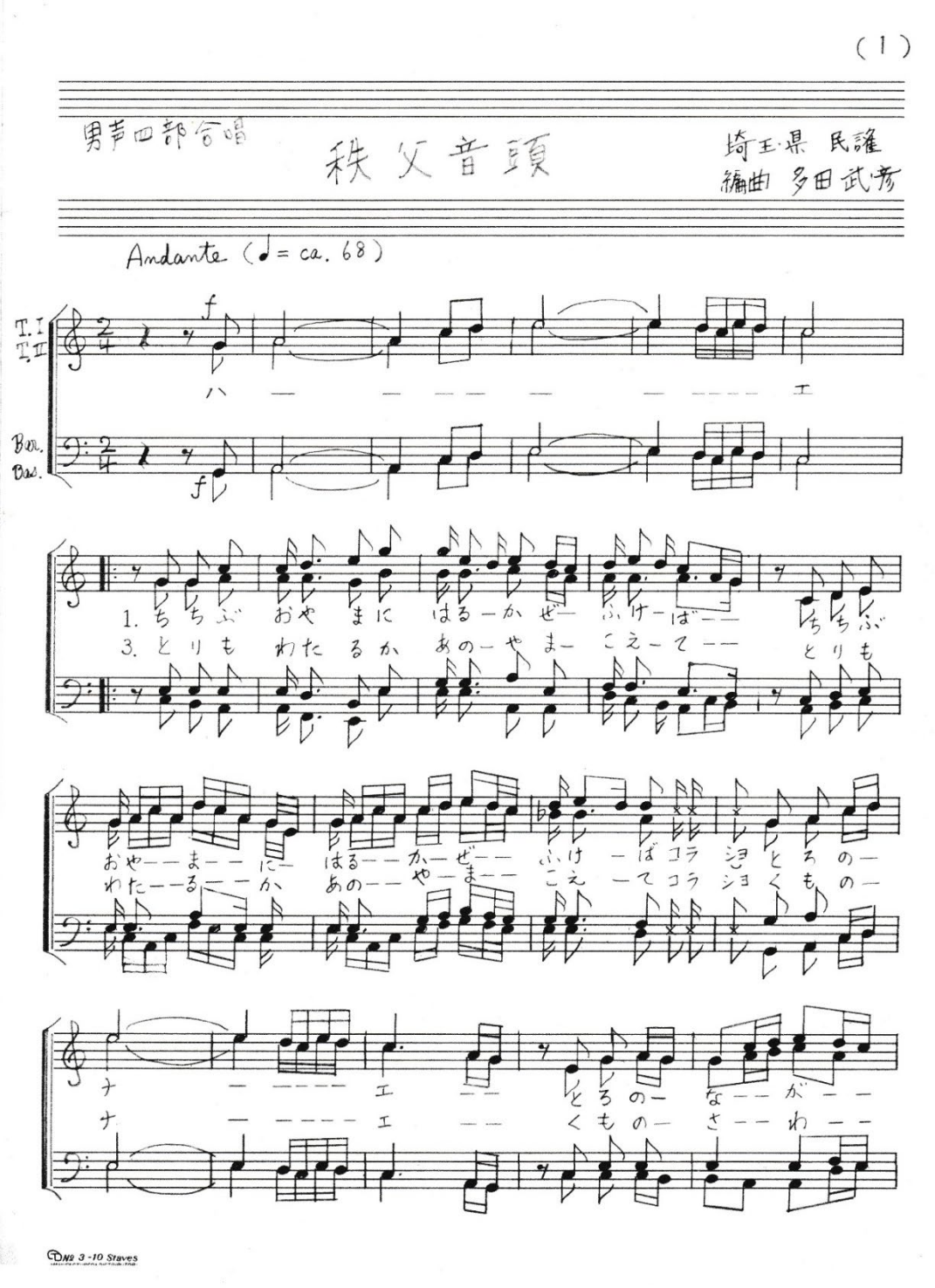
『秩父音頭』は、埼玉県秩父地方に古くから伝わる民謡で、昭和５年、明治神宮遷座 10 周年祭に「秩父豊年踊り」として奉納され、その後『秩父音頭』と名を変え、以来埼玉の代表的民謡として広く親しまれています。現在では、関東三大民謡の一つとしての地位を築き上げたといわれています。

末永く愛唱して参りたいと思います。末筆ながら、多田先生のご好意に心よりお礼申し上げます。

2005 年６月１日
男声合唱プロジェクトＹＡＲＯ会
加藤良一

公開練習でタダタケさんが「秩父音頭」を解説

平成17年(2005)12月11日の「男声合唱プロジェクトYARO会第2回ジョイントコンサート」に備えて、タダタケさんが「秩父音頭」の指導にお出で下さいました。そこで、よい機会なので練習を無料公開とし多くの方が参加されました。



重厚な無伴奏男声四部合唱に生まれ変わった「秩父音頭」

通常、盆踊りなどで歌われる「秩父音頭」よりずっと遅いアンダンテにテンポを設定し、滔々と下り行く長瀞（ながとろ）の流れを想わせるゆったりとした重厚感のある曲調となりました。

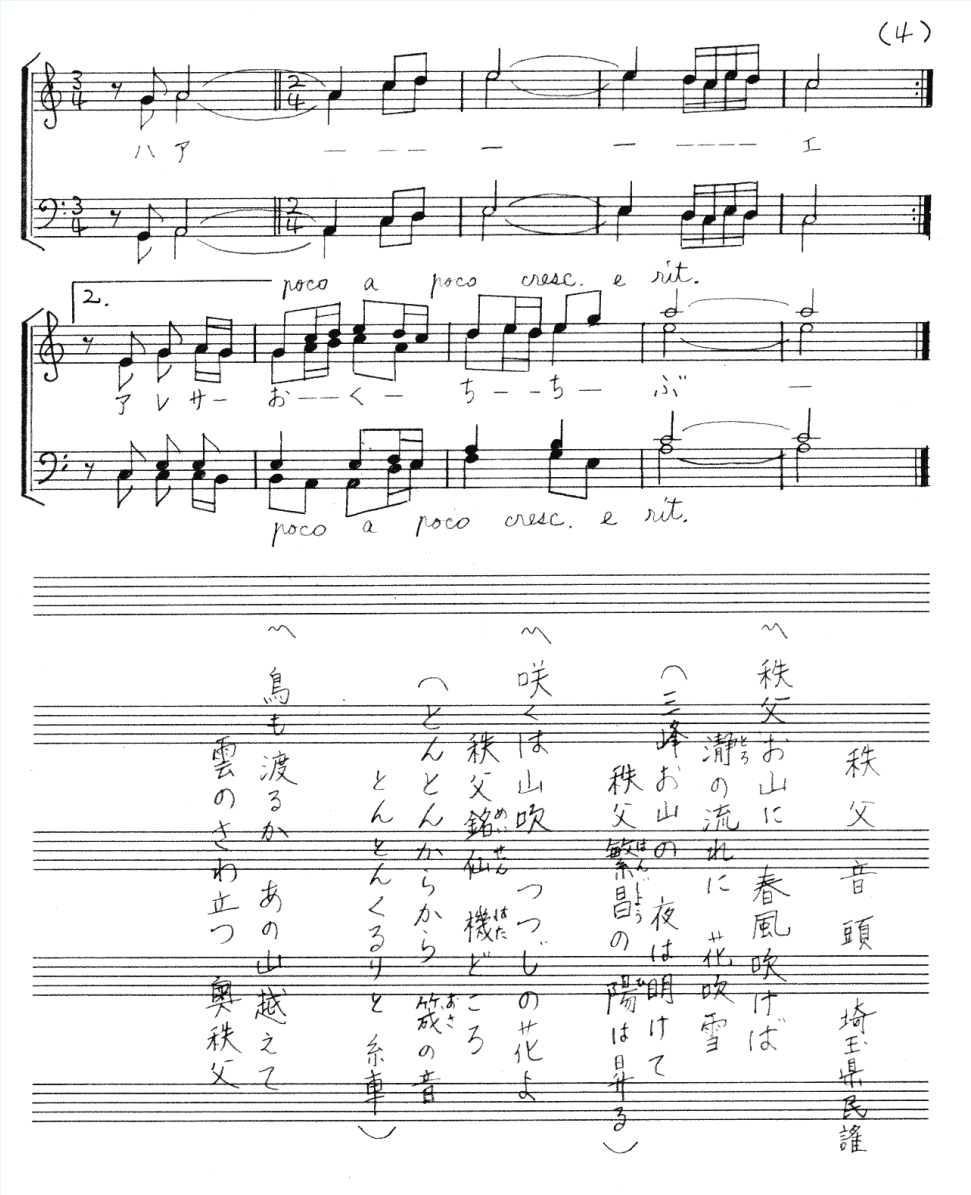
たくさんの歌詞の中から秩父に因んだこれぞというものが選び出されています。「**瀞（とろ）の流れ**」「**三峰（みつみね）お山**」「**秩父銘仙**」「**機（はた）どころ**」「**箴（おさ）の音**」「**糸車**」など秩父に因んだ言葉がちりばめられています。また、カッコ内の歌詞は語りとなっていて、曲全体に変化を与えています。フィナーレは、金子伊昔紅（かねこいせきこう）の「**鳥も渡るかあの山越えて　雲のさわ立つ奥秩父**」で高らかに歌い上げられます。

『秩父音頭』

(平成17年(2005)12月11日)

男声合唱プロジェクトYARO会第2回ジョイントコンサート・アンコール

https://www.youtube.com/watch?v=naIxaeSmvqs



多田武彦合唱講習会にて
平成17年(2005)2月5日 男声合唱プロジェクトYARO会主催
左から、**加藤良一**、**多田武彦**先生、**須田信男**、**関根盛純**
発足当時のYARO会三羽烏で講習会を企画運営

【関連情報】
男声合唱プロジェクトYARO会ホームページ
www.ric.hi-ho.ne.jp/neo-rkato/yaro/yarokai_top.html

Back
多田武彦〈公認サイト〉TOP へ

Home
HOME PAGE へ